

発達に遅れがみられる1歳児クラスA児の事例研究

—母子の愛着関係に着目して—

A Case Study of a 1-year-old A Child with Delayed Development

- Focusing on the Attachment Relationship between Mother and Child -

前田 綾子・矢野 正

Ayako MAEDA, Tadashi YANO

要旨 (Abstract)

平成30年度に1歳4か月で保育所に入所したA児に初めて会った時、今まで見てきた1歳児の姿とあまりにも大きく違っており、驚きを隠せなかった。A児は、身体の大きさはやや小さいものの特に低体重、低身長という体形ではなかった。しかしながら、その顔には全く表情がなく何をみているのか眼差しがうつろそのものであった。そして、なにもせずじっとして動かない。手のひらをぎゅっと握り、腕はW型、足はM型でその姿は、新生児を彷彿とさせた。母親と離れる場面でも、迎えに来た場面でも、母親にすら何の反応もしめさなかった。本来なら全ての発達のベースとなる母親との愛着関係やアタッチメントが形成されているはずであるが、それがなされていないことがすぐに分かった。そのようなA児に対して保育所として何ができるのか、何をすることが必要なかを考えて、まず保育者との愛着関係づくりから始め、運動発達を促す関わり、保護者支援、関連機関との連携などをスモールステップで計画を立てて保育をすることで、健常児に比べて遅れはあるものの目に見えて情緒が安定し、表情が豊かになり、運動発達が促されていった。結果として、保育士として喜ばしいことであったが、生まれてから1年の間に食べ物は与えられても、愛情が伝わるような養護を受けてこなかったことがその後の子どもの成長、発達の及ぼす影響の大きさを明確に示した事例であると考えられた。

キーワード：親子、愛着関係、1歳児、発達の遅れ、事例検討

I. はじめに

子どもが生まれてからすぐにもっとも身近に関わる大人は、母親であることが多いと考えられる。まだ言葉を獲得していない新生児にとって、自分の要求を示す方法や術は泣くことしかない。その泣きに対して、あるいは、泣きもしないのに「眠たい」「おなかがすいた」などの欲求に、優しく言葉を添えて敏感に答えてくれる母親との関係において、愛着関係やアタッチメント (attachment) が成立する。しかし、母親になったからといってそのような子どもとの関わりを誰でもできる訳ではないとも考えられる。近年、虐待などの報道が騒がれて久しい。

今回、母性はあり、愛情はあっても子どもとの愛着・愛情関係が成立せず、そのことが子どもの発達に影響を与えているという事例による検討から、親子間における愛着関係について考えてみたい。

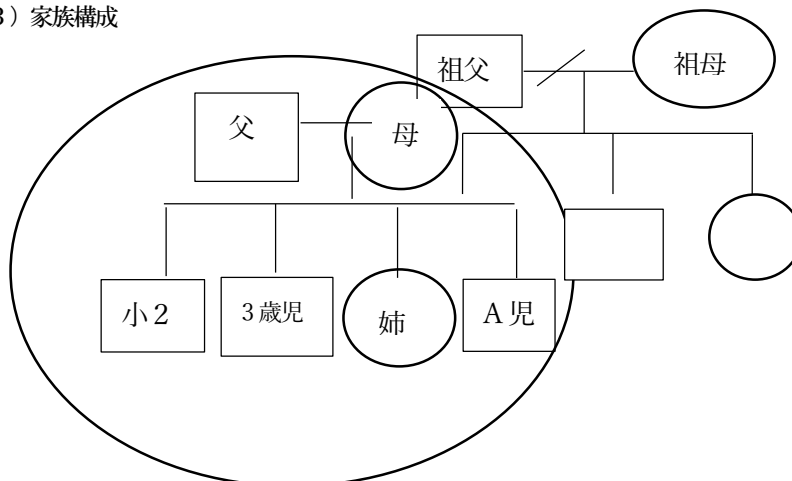
II. A児の家庭背景と問題の所在

(1) 生年月日 平成28年12月7日生

(2) 妊娠・出産の状況

切迫早産の恐れにより2か月入院。妊娠期間37週、帝王切開で生まれる。出生時、異常なし。
体重2,636g、身長47cm、頭位31.5cm、胸囲31cmであった。

(3) 家族構成



- ※ 祖母は同居はしていないが、送迎の手伝いをする。母に対して、威圧的な言動が見られる。
- ※ 姉とA児は双子。
- ※ 父は子どもへの関心がなく、育児への参加は無い。以前、DV歴有り（子どもの面前を含む）。
自分の父母とは絶縁状態。
- ※ 母は内向的で抑うつ状態。
- ※ 父母ともに養育力は、低いと思われる。

以上のような家庭背景が、A児の発達に何らかの影響を与えていることはおおよそ推測できるが、双子の姉も発達に遅れは見られるものの、A児ほどでは無いことから、全てが環境的要因とは言い難いものと考えられる。

(4) A児の面接時の発育状況（1歳2か月）

- ・ 首が座る（3か月） ・ 寝返りを始める（4か月） ・ 歯が生える（7か月）
- ・ あやすと笑う（4か月） ・ 音のする方を見る（6-7か月） ・ 話しかけるような声を出す（3か月）

その他の項目である ・ハイハイを始める ・つかまり立ちをする ・歩き始める ・人見知りをする ・知っているものを指差しする ・おいで、ちょうだいかわかる ・一語文を話すの項目はまだしていないとのことで、1歳2か月という月齢から考えると遅れがあるということが明らかとなった。

(5) A児の保育所入所時の姿（1歳3か月）

A児に初めて会ったとき、他の新入所の1歳児達が不安そうな表情で母親に抱かれていたり、母親と一緒にいることで安心して笑顔を見せたり、回りにあるものが珍しくてあちこちに視線を走られたりしていた中で全く表情を出さずに無表情で視線の定まらない様子であったことに、違和感を覚えた。

2日目以降、保育所に来たA児は座位をとることがまだできなかったため、母親はA児を保育室におお向けに寝かせていた。母親が保育室を出ていく際「Aくん」と名前を読んでも振り向くことも母親の姿を視線で追うこともせず、ただ何を見てもなしに空間に視線を置きじっとしていた。

保育士が視線を合わそうと「Aちゃん」と優しく名前を呼び顔を覗き込んでも、反応はなく視線が合うこともほとんどなかった。視線が合ったとしても一瞬で、視線が保育士の顔に留まることはなかった。

声を発することもなく、面接時にできるとなっていた「あやすと笑う」「話しかけるような声を出す」も見られなかった。かと言って、表情は無表情ではあるが、不安そうな表情でもなくて両腕でWのように、両足でMのような形になる、乳児がリラックスしている時の状態を見せていた。

あまりに保育士の言葉かけに対しての反応が低いため、聴こえが気になり、耳から10cmほど離れたところで音のする玩具を鳴らすと音のする方を向いたので、聴こえていることは確認できた。

自分から体勢を変えようとしたり、保育室にあるものに関心を示したりすることがなく、三項関係は成立していなかった。

声を発することがほとんどなく、声を出してもか弱い声のクーイングで、泣くこともなかった。手はグーで握っているため、玩具を渡そうとしても握ることができなかった。

A児の姿をDENVER式や遠城寺式発達検査表に当てはめて考察すると、3か月-5か月の発達だと考えられた。何より気になったのは、母親との愛着関係ができておらず、人への関心を示さないことであった。これはエリクソンの乳児期の発達段階である基本的信頼 vs 不信において希望を得ることができていないと考えることができた。

登降所時の母子分離場面の様子を、乳幼児期のアタッチメントの個人差の測定であるストレンジ・シチュエーション法に照らし合わせると、「回避型」であった。

菅野ら(2010)の愛着の発達段階によると第1段階(3か月頃まで)の特徴は、不特定多数の人物に対して、注視する、泣く、微笑む、声をだすなどのシグナルを送る。第2段階(6か月頃まで)は乳児がシグナルを送る対象が特定の人物になってくる。A児の生活年齢である第3段階(6か月から2、3歳まで)運動機能の発達に伴い、これまでのシグナルに加え、後を追ったり、抱っこを求めたり、しがみついたりなど、能動的な行動を通して、特定の対象との接近を耐えず維持しようとする。また外界への興味も高まり、特定対象を安全基地として探索行動をするようになる。とあるが、A児は第1段階の姿も見られなかった。

このようなA児の姿から、保育士はA児の支援のターゲットを保育士とA児との信頼関係、愛着関係の形成に絞り、A児に対して丁寧な応答反応や優しく豊かな言葉かけ、アタッチメントなど、新生児が母親から受けて愛着関係を形成していく過程を保育者が母親の代わりとなってA児の大人への信頼や情緒の安定、安心感、人への関心を育むことにした。

子どもに関わっていく上で、今この子どもには何が必要なのかということ子どもから正しく判断してターゲットを絞るということは子どもの発達において非常に重要なことである。

(6) A児との関わり

保育士に抱かれたり、触れられたりすることは喜びもしないが、拒否もしないA児であったため、抱いて触れ合う心地よさや、回りの大人(保育士)が自分に対して応答的に関わってくれることを知らせるように意識して保育をした。A児が声を出さなくても、「お腹すいたね。ご飯食べようね」「おしっこ出たね。気持ち悪かったね。綺麗にしようね」「嬉しいね」など、A児の表出されない想いを言語化しながら関わり、抱く、腹ばいになっているA児

の目線に合わせて名前を呼んだり、玩具を見せたりして行った。グーで握っていた手も保育士がそっと開いて保育士の手とポンポンと打ち鳴らして遊ぶなど変化していった。

そのような関わりを通してA児は保育士が関わりと笑顔を見せることや保育士が玩具を渡すとグーの手を開いて握る姿が出てくるようになった。

予想より早くA児の反応が変わってきたため、これは、本来なら家庭での母親との関わりで育まれるものであり、A児も初めは見せていた姿であったが、家庭の中で放置されていることが多く、シグナルを送ることを諦めてしまっていたのではないかと推察された。

(7) 保護者への支援について

筆頭筆者は、A児の母親が2歳児のときに保育所で担任をしており、家庭背景もよく知っているが母親自身が適切な養育を受けていたとは言えず、養育力も低いことはA児の姿からは想像することができた。しかしながら母親を否定せず、4児の母親としてがんばっていると受け止め、日々の送迎時に話しかけるようにして関係を築き、子育ての大変さや心配事を母親が言えるように関わっていった。また、A児の変化を細かく伝えるようにした。

(8) A児の変化と成長の姿

A児は保育者との関わりを通して、目に見えてその姿が変わっていった。生まれてから保育所に入所するまでの発達の遅れを取り戻すようで、保育者もその変化には目を見張るものがあった。しかし、言語面と運動面の遅れはなお心配であった。

(9) 関連機関との連携について

以前は、1歳半健診・3歳児健診において保育所に在籍しているというだけで、発達面は大丈夫であるとスルーされてしまうことがあったが、今は連携を密にしているために気になる子どもに関しては保育所から事前に情報提供をして専門相談につなげてもらうようにしているのであるが、A児に関しては入所直前に受けた健診（時期はずれたが、1歳半健診）で、特に指摘事項なしとのことでたいへん驚いた。保健センターに確認したところ、遅れがあることは認識していたが、それを指摘することで健診にこなくなってしまう心配があるため伝えずに継続観察とし、7月に再度健診を受けるよう伝えたとのことだった。A児の発達状況について保育者の所見を伝え、7月の健診では必ず専門相談に繋ぎ発達を診てもらうように依頼をおこなった。

しかし、7月の健診の健診（受診は、ずれて9月受診）では、歩くのが少し遅いから2歳になる12月に保育所に保健師が来て様子を見るという話で終わっていた。保健センターに問い合わせをすると、母方祖母が同席していたため言えなかったとのことだった。

保育所としては、保健センターを通して発達検査につないでもらう方が、医師の診察もあるため母親が受け入れやすいと考えたのだが、うまくいかなかった。そのため、保育所からの働きかけで医療機関につなぐことにした。

(10) 医療機関につなぐ支援

A児の成長をともに喜びながらも言語面、運動面の姿を客観的に伝え、医療機関への受診を保育者から提案した。こうした提案を受け入れられない保護者もあり、築いてきた関係にひびが入ってしまうこともあるのだが、A児の母親は、母親自身も心配していたため受け入れはスムーズであった。しかしながら、母親ほどこの医療機関を受診するのか、何と言って診てもらったらよいかかわからなかったため、どこの医療機関に行くのか、発達相談を受けたい旨を伝えることなど具体的に伝えていき、病院に行くときは同行することを伝え、母親が不安にならないように配慮

した。

このような経過を経て、現在進行形で関わっているA児のケースである。

保育所は療育施設ではないし、保育者は発達の専門家でもない。しかし日々、子どもと接し「保育」という営みにおいて子ども理解は最も重要なことである。子どもが示すあるいは示さない態度や反応の一つ一つの理由を発達面から環境面から正しく理解することが求められる。そのためには、少なくとも子どもの発達に対する知見を深める必要がある。保育の分野だけでなく医学、臨床発達心理学の分野などから様々な発達を読み取る方法を学ぶ必要を感じる。

先日、A児の新版K式の発達検査に同席し、あらためてA児の発達がよく分かった。A児の発達は1年ほど遅れており療育も視野に入れる範囲にある。しかし、心理士に4月のA児の状況を伝えると「保育所ですごく成長したんですね」と驚いておられた。そして「Aちゃんのことは療育より保育所にお願ひしましょう」と母親に言っていた。確かに保育所は保育者との安心安定の関係の下、環境や友達から多くの刺激を受け遅れのある子どもの発達を促す場となっている。A児にとってもそういう場所になるであろう。

それだけの期待を背負っている保育所の役割は、大変大きくなってきている。

しかし、保育者は保育所でしか子どもと関わることができない。家庭の養育力の向上や小学校へのスムーズな引き継ぎが今後の課題であると考える。子どもへの支援は保育所と小学校の連携でバトンタッチができたとしても、公的な支援、サービスが入らない家庭に対してのサポートが保育所を卒園すると現在のような母親へのサポートが途切れてしまうことも大きな課題である。

保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領において「幼児期における教育は、家庭との連携を図りながら、生涯にわたる人間形成の基礎を培うために大切なもの」「子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うことが保育の目標」と示されている。

小学校就学後になっても細やかな支援が必要な保護者をサポートしていけるような体制づくりが必要なのではないかと考える。

Ⅲ. 総合的考察

新生児期の母子（親子間）の関わりにおいて、母乳は与えられ空腹は満たされていたため、首の座りや寝返り、歯の生え始めなどの発達までは順調であったと考えられる。しかしながら、その後の運動面、情緒面、認識面での発達が止まってしまっていたと推察されるA児であった。このことは、単に食べ物を与え、オムツを変えるといった行為だけでは子どもは発達をしないということを如実に表していると考えられる。

また、食事や排泄などの本能的な欲求を満たすと同時に、温かい言葉かけ、気持ちの応答性、何より肌を触れ合うことで通じる温かさや情緒の安定が伴わないと、子どもは自分から発信すること、何かをしようとする意欲もなくなってしまう。愛着関係やアタッチメントが成立することで子どもは動けるようになると自然に盛んに探索活動をはじめめるが、愛着関係が成立していないと、子どもは自ら発達をするのをやめてしまうかのような状態になると、今回の事例を通して推察された。

今回の検討事例からはそれほどに、愛着関係が子どもの心身の発達に影響を与えることが明らかとなった。今後も保育所における保護者支援に取り組んでいきたいと考える。

文献 (References)

- ・厚生労働省 (2018) 『保育所保育指針解説書』 フレーベル館
- ・文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説書』 フレーベル館
- ・内閣府・文科省・厚労省 (2018) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』 フレーベル館
- ・無藤隆・岡本裕子・大坪治彦編著 (2004) 『よくわかる発達心理学』 ミネルヴァ書房
- ・無藤隆・古賀松香編著 (2016) 『社会情動的スキルを育む「保育内容人間関係」乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは (実践事例から学ぶ保育内容)』 北大路書房
- ・小川圭子・矢野正 (2016) 『保育実践にいかす障がい児の理解と支援』 嵯峨野書院